
最後の大隊

TOMBOY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の大隊

【Nコード】

N0566F

【作者名】

TOMBBOY

【あらすじ】

1945年・夏。アメリカ軍による原子爆弾の使用を阻止すべく、男たちは行動を起こす。本郷少佐率いる落下傘部隊は歴史に名を残すことなく、ただ使命のためだけに絶望的な戦いを始める……

序

灰色のどんよりとした雲が空を覆う、薄暗い夕方時であった。熱帯性の低気圧は関東一辺に広がっており、蒸し暑い地上に今にでも雨を落としそうな様相を見せていた。

陸軍第一部第六課は大本営の庁舎の地下四階に設置されている。

前年の秋から始まったアメリカ戦略空軍による無差別爆撃は、半年が経過した現在ではすでに日常の如く行われており、日本の主要都市のほとんどが壊滅的打撃を受けている。その影響はこの戦争を統率する大本営でも受けており、電力の使用も制限されているのが実状だった。お陰で冷房は使えず、生暖かい空気がどこもかしこも支配している。

扇風機の無味乾燥な音の他に聞こえるものと言えば、課員たちがひたすら走らせるペンの音だけだった。第六課長である吉川正巳大佐は、戦局がもはや絶望であるという書類に目を通しつつ、沈黙だけが支配する空気に絶えられずに煙草に火を付けた。主に欧米情報を抱う第六課ではあるが、戦線が本土である沖縄にまで迫っている現状を見れば、すでに意味を失っているのは明白であった。それでも六課が存在するのは、もはや人事というものに意味を見出している人間がいないからである。勇敢な軍人はもはや死に絶え、若者たちは体当たりによる自爆戦術によって希少となりつつある中、こんな部署にいるのは戦傷によって使いものにならぬ者か、保身に長けている人間だけである。少なくとも吉川はそう思っていた。

煙草の灰を落としてつつ、吉川は頬から首筋まで伸びる古傷をなでた。師団付の参謀としてあの悪名高い『インパール作戦』に従事した際、吉川の師団は全滅した。すでに護衛の兵などなく、燃えさかる司令部を単身脱出した時、茂みで若いイギリス兵を殺した。吉川にはほとんど記憶はないが、敵兵の銃剣が頬を切り裂くと同時に銃把で相手の頭を殴りつけたのは覚えている。褐色の生暖かい血が

顔に当たった次の記憶は、野戦病院で治療を受けた時のものだった。この課にいる人間はだいたいそんな境遇の者たちであった。部隊も失い、幾多の戦友を残して生き残った、抜け殻のような軍人。そんな彼らの祖国も、近いうちに滅びる運命にある。

虚しいものだな……。思い返せばその一言につきる。誇りなどをつくの昔に消え失せた男にとって、現実などただの笑い種にしかならなかった。

「大佐殿」

その声でゆっくりと吉川は顔をあげた。対米諜報専門の二係の長である綿貫重良大尉が茶封筒を持って立っていた。

「なんだ？」

「『マツ17』からの定期情報です」

『マツ17』とはハワイに飼っている諜報員である。ほとんどの諜報員が逮捕される昨今、『マツ17』が補足されていないのはその見かけであろう。七十過ぎの米原住民の老女がスパイとは、さすがのアメリカ情報部も気がついていない。

「興味のある記事はあるか？いまさら新型空母が入港、なんて聞いても戦局がかわるわけでもあるまい」

「興味深いものです。わが国の今後に関わる情報です」

綿貫は濁して言ったが、つまりは敗北の日付が近づいた、ということか。吉川は毒づきながら茶封筒を受け取り、中を開いた。

写真であった。真珠湾を出港する巡洋艦―おそらくインディアナポリスであろう。併走する駆逐艦も二隻映っている。

「昨日撮られたものです。ラッパ隊も見送りもなしでの出港ということですよ」

「内密での行動ということか？」

「はい。どの通信隊もインディアナポリスの出港を確認していません」

「味方にも知らせず、か。実に興味深い」

「興味深いのはこの艦の積み荷です」

「……何を運んでいる？」

「おそらく、『癩癩玉』ではないかと」

綿貫の言葉に、吉川は背筋に寒気が走るのを感じた。癩癩玉。半年前、ニューメキシコでアメリカ軍による実験が行われた、新型爆弾のあだ名。核分裂を利用した新兵器であり、調査の結果では都市一つを吹き飛ばすことが可能、ということだった。

その癩癩玉が本土からハワイ、そして何処かへ輸送される。実戦で使用するために……。

「確かなのか？」

「七割は固いです。この警戒は、それ以外には考えられません」

アメリカは恐らく、日本の降伏を認めないつもりであろう。リメンバー・パールハーバーから始まった不意打ちに対する仕返しの際決算。つまり日本人を一人として生かさないうつもりだろう。

煙草を灰皿でもみ消しながら吉川は叫んだ。

「対策を立てる！参謀総長に知らせろ！」

額から古傷に流れる汗は興奮のためか、それとも冷や汗か。吉川には判断できなかった。

少佐の兵士

よく晴れた日であった。この一週間、時々雲の合間から拝めるくらいしか望めなかつた青空がいつぱいに広がっており、背の高い入道雲がいくつもわいている。

本郷功少佐は顔を上げて、空を眺める。南国独特の抜けるような淡い青。この数年、様々な地域で空を見たが、どこも同じではなかつた。

さて、前に空を眺めたのいつだったか、と思つたとき、本郷の耳に慣れた轟音が届いた。ギヤラギヤラとした、鈍重な金属音。生理的に危険を匂わせるその音は、間違いなく戦車のものだ。本郷にとつて敵が歩兵のみなどとはどだい考えてなく、予想していたことではあつたが。

「5、6両といつたところでしょうな」

脇でそう言つたのは副長の加賀見直満中尉であつた。学徒出陣によつて陸軍に入隊した男だが、ガダルカナル、ルソンと転戦したことにより、もはや大学生としての面影はない。窪んだ眼孔にギラギラとした目だけが光る、空挺隊員としての容貌だけが目につく。

「随伴する兵は三個大隊といつたところだろうな。いつも通り、戦車を先頭にやつてくるだろう」

「スチュワートならありがたいですな。うちの速射砲でも打ち抜ける」

「そうであつてほしいがシャーマンだろうな。特に敵が塹壕に籠もつている場合は火炎放射器を備えた戦車を先頭に押し出してくるに違いない」

本郷はそう言い、薄汚れた制帽を被り直した。少佐であつてもヘルメットを着用することが義務づけられているが、あえて本郷は制帽を使用している。ヘルメットが重く、動きづらいということもあるが、死ぬときはどんなときでも死ぬと感じているからだ。

首里城の北西約三マイル。密林とサトウキビ畑の間の小高い丘の上に本郷たちは布陣していた。大隊の主力約二百名は一メートルほどの塹壕に籠もっており、その前方にはいくつもの蛸壺が掘られ、富樫孫一郎曹長率いる肉迫要員が爆雷竿を抱えて潜んでいる。その前方は密林であり、戦車のキャタピラー音はそこから聞こえている。本郷たちの塹壕の後方の丘の上には土囊と草によって隠蔽された37ミリ速射砲が四門備えられている。

「落下傘兵というものは……」

加賀見が苦笑しながら言う。

「どこにいつでも便利屋ですな。とくに負け戦となれば」

「そういうものさ。司令部にとってはこんな使いやすい部隊は他にない」

本郷の指揮する第一落下傘連隊第一大隊は現在、牛島中将の第32軍の指揮下にあり、この高地の死守を命じられている。元来、落下傘部隊は航空機により降下され、敵の後方にて作戦を行うものなのだが、すでに日本陸軍には航空機自体が希少となっている。その上、沖縄にある全ての飛行場は占領されていた。

「落下傘部隊は最新の武装が揃っている。しかも古参揃い。それでいて正規の部隊が存在しないのだから火消し役にはもってこいというわけさ」

第一落下傘連隊はルソン島において壊滅しており、残っているのは第一大隊のみであった。もはや所属するべき部隊が存在しない大隊は、台湾に移動した後、この第32軍に編入され、輸送船によって半月前に沖縄にやってきた。

「司令部の連中もだからこそ我々をここに配置したのだ。落下傘兵の実力を信用しているからこそ、司令部の前面にて死守命令を下した」

「まあ、どこの馬の骨ともわからん連中だからこそ、一番危険な最前線に置いた、というのが正確かもしれませんね」

そう言い、加賀見はポケットから 光 の箱を取り出し、本郷に

勧めた。マツチで火を付け、煙を吐き出す。妙な静けさが辺りに漂っている。

「この戦争が終わったら銀座あたりで一杯やりたいものだ」

「そういう台詞は大本営では『敗北主義』と言っらしいですよ」

「精神論で勝てると思っっているほど若くはないさ」

そう言い、本郷は泥と垢にまみれた顔に笑みを浮かべる。

「特に死に神に惚れられているような今日のような日ではな。なんだか十も二十も老けているような気がするよ」

本郷は三十二歳だが、知らぬ人が見れば四十だと言っだろう。戦いが人間を老けさせるのである。

加賀見が何かを言いかけたとき、不意に甲高い音が響き渡った。独特のその音はまさしく砲声。数秒後、密林の手前に爆音と共にいくつもの炸裂がおこる。

本郷は煙草は投げ捨て、「さて……」と言った。

「落下傘兵の諸君、我々の仕事である 戦争 の時間だ」

塹壕に潜んでいた兵士等が立ち上がり、一斉に銃口を密林に向けた。その時、深緑色に不格好な白地の星を車体下部に描いたM4シヤーマンが木々をなぎ倒しながら姿を現した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0566f/>

最後の大隊

2010年10月9日05時27分発行